

李穌書著『晉唐道教の展開と三教交渉』

神 塚 淑 子

道篇

本書は、二〇一八年九月に「六朝隋唐期における道教

思想の整合化と三教交渉」という題目で東京大學に提出

された博士論文をもとに、章立ての變更や新しい論考の

追加などを行って、二〇二二年三月に出版されたもので、

總ページ數五百を超える大著である。本書の概要を紹介

し、氣がついた點を若干記すことにしたい。

本書の全體の構成は次のようになってゐる。

第一章

「道」の諸貌…東晉南北朝初期道經における
「道」を中心に

第二章

再び「道」へ…隋代以前における重玄思想に
ついて

第三章

隋唐初期道教における般若學の空思想の受容
について

第四章

三清考

教篇

第五章

北朝道教に關する幾つかの考察

序論

第六章 晉唐佛教の道教批判論理の定型化

——『弘明集』『廣弘明集』を中心に——

第七章 晉唐佛教の道教教理の理解について

——『弘明集』『廣弘明集』を中心に——

第八章 道教・儒教と王權

——漢唐間における道儒二教の祭祀儀禮を中

心に——

終章

まず序論では、道教經典、重玄、道教史、老子・老君、道教造像の五項目に分けて、魏晉南北朝隋唐期の道教についての先行研究を紹介したあと、本書の目的と構成について説明している。先行研究については、日本・中國・臺灣・歐米各國の研究を廣く涉獵して簡潔に紹介しており、この時期の道教に關する研究史と現在の研究状況の概要を知る上で有用である。本書の目的としては、二世紀から八世紀に至る約六百年間は道教諸組織による大規模な統合化・體系化が行われた時期であるので、そ

の統合化・體系化の活動を、道佛兩教・儒佛道三教の交渉を視野に入れつつ考察し、道教思想の展開を分析・説明することであると述べる。

本書の本論の構成は、「道篇」と「教篇」の二つに大きく分かれている。著者の説明によれば、「道篇」では「當時の道教がいかに関理の中核たる「道」を捉え展開させていったのか」(二八頁)という問題を論じ、「教篇」では、「道教が一つの「教」として、儒教、佛教及び民間信仰そして王權との應酬の歴史過程において、いかに自身の獨自性を保ちつつ、進化展開していったのか」(三〇頁)を論じるといふ。「道篇」「教篇」という篇名は、本書全體が「道教」について論述した書物であることを意識しての命名であろうと思われるが、博士論文の段階では二篇編成ではなく、本書の出版にあたって章の配列を變え、第一章を新たに追加して、このようにまとめたようである。そういういきさつもあつてか、「道篇」と「教篇」に收められた各四章の内容は、必ずしも著者が説明するように二つに截然と分かれるものではなく、相

互に入り組み關連しあっている。

第一章では、東晉から南北朝初期にかけて江南地域で作られた上清の經典群（著者は古上清經と呼んでいる）と靈寶の經典群（同じく、古靈寶經）における「道」の認識と至尊神の問題を取り上げている。結論として、古上清經は、『老子』の説く「道」には殆ど關心を示さず、體內の氣を修練することによって神仙になることを理想の「道」としており、共通する至尊神は形成されていないこと、一方、古靈寶經は、靈寶の教えそのものを「道」と見なし、元始天尊という神格を至尊神として創出していること、そして、古靈寶經のこのような新しい動きの背景には、佛教が興隆する中であって、「祕匿性が高い古上清經に反し、大乘佛教が掲げる衆生濟度の精神を繼承發揚」しようという志向が存在した（二〇一頁）と指摘する。

第二章は、佛教三論學の論法を用いた『老子』解釋學である重玄思想について考察し、重玄思想の發端は通説の東晉期ではなく、南朝梁までしか遡れないことを指摘

するとともに、重玄思想が出てくる基盤には魏晉玄學が存在し、郭象の『莊子』注や支遁の文の中に、重玄思想と本質的に同じ一面を持つ「雙遣不滯」の思想が見えることに注目する。第二章の章題「再び「道」へ」は、一見したところ唐突でわかりにくいだが、南北朝末から隋の頃、道教が老莊の「道」に「自己」回歸し、そこに道教教理の論理依據を求めた」（一四九頁）こと、逆に言えば、第一章で考察した古上清經と古靈寶經には、『老子』の説く根源的な「道」のことがほとんど觸れられていなかったことを意味して、「再び「道」へ」という表現が用いられている。中國思想史における重玄思想は、一面においては魏晉玄學の傳統思想へ回歸する思想的動きであったという本章の著者の指摘は、十分に首肯できる。

ただ、重玄思想が「神仙術を論理づけることにより、その修養論をより高次元へと飛躍させようとした重要な試みの一つ」（二四九頁）であったと斷言できるのかどうかという点については、評者はいささか疑問を持つ。著者自身、一方では、「これ（評者注：重玄思想）を過大視

することはやはり避けるべきであろう」（一五一頁）と述べているように、重玄思想と道教との関わりをどこまで認めるかという問題とも絡んで、このあたりはさらに慎重に考える餘地があると思われる。なお、重玄思想の文献に頻出し、本書でも繰り返し出てくる「遣」という字を、本書では、日本語譯でも解説文でもともに「遣わす」と讀んでいるが、これは「遣る」と讀むべきものである。もつとも、本書第七章では「有を遣る」と正しく讀み（三五六頁）、本章でも『莊子』郭象注の引用では「執着しない」と正しく譯している箇所もあるので（一四六頁）、おそらく著者の日本語の問題から生じた誤りであろうと思われるが、「遣」は重玄思想のキーワードであるだけに、讀者としては氣になるところである。

第三章は、佛教教理を大量に攝取した道教經典『太玄真一本際妙經』と、教理をまとめた類書『道教義樞』を中心に取り上げ、道教が佛教般若學の空思想をどのように援用してみずからの教理體系を構築しようとしたのか、原文を引用しながら考察する。この中で、隋から唐

代初めにかけての時期に道教經典の中に佛教教理が大量に攝取されたことは、「道教の面目が次第に希薄化」することを招き、その結果、それ以後は再び、「道教元來の氣論や生成論」を重視し、「道教本來の姿に回歸しようとする努力」が顯著になってきたと述べている（一八八頁）。このように、この時期の道教經典が道教史において占める特異な位置に留意する視點は重要であろう。

なお、本書では引用する原文に對して、訓讀ではなく、解説を交えた意譯風の獨特の日本語譯をつけている。本章について言えば、佛教語の譯でいくつか修正を要する箇所がある（一六九頁「生死道場、等无所有」、一七四頁「但求道場、成無上道」、一八一頁「能權能實」ほか）が、全體として見れば、説明を補ったわかりやすい日本語譯がなされ、讀者の理解を助けてくれる。

第四章は、元始天尊・靈寶天尊（太上道君）・道德天尊（太上老君）の「三清」を道教の至尊神とすることがいつ頃成立したのかについて、南北朝から宋代にかけての諸資料を廣く調査検討し、三つの結論を導き出す。第

結論を導き出したことは注目される。

以上で「道篇」が終わり、續いて「教篇」に入る。

一に、隋代までの道教經典には「三清」という語が道教の天界を指すことばとして頻出するが、それはまだ、「玉清天・上清天・太清天」から構成される天界としては用いられておらず、共通した至尊神の信仰體系を見い出せないこと、第二に、隋唐期には元始天尊・太上道君・太上老君という至尊神の信仰體系が形成されたが、この三柱の神靈を明確に「三清」と呼んだ形跡は見當たらず、この三柱の神靈の中で元始天尊のみを尊重する記述が多いこと、第三に、五代十國から南宋にかけては、「三清」が明確に「天尊・道君・老君」のことを示す記述がよく見られ、各地の道觀にも「三清」と名附ける建物が増加していったこと、以上の三點である。北京白雲觀をはじめ、現在、各地の道觀において最高神として「三清」が祀られていることはよく知られており、この「三清」を至尊神とする信仰體系がいつ頃成立したのかということとは重要な問題であるが、これについてはこれまで定説がなく、「三清」に関する研究はあまり多くなかった。そういう中で、諸資料を丁寧を検討し、上記の

第五卷では、北朝における道教の歴史を、道教經典のほか、造像記や『魏書』釋老志・『隋書』經籍志などの諸資料を用いて考察し、北朝においては五斗米道を受け繼ぐ信仰共同體の組織を基盤としつつ、次第に南朝道教の教理・思想を吸収し、至尊神も太上老君から元始天尊へとという變化が生じ、唐代の整合的な道教へとつながっていったと説明している。著者が指摘するように、南北朝の政治的分立の中にあつて、北魏の『老君音誦誡經』と劉宋の『陸先生道門科略』の内容の類似性が示すとおり、道教の南北の差異はそれほど顯著ではない。北周で興った樓觀道は、南朝道教の性格を強く有しており、明らかに道教の南北交流が存在していたことがわかる。その交流の據點や互いの情報交換の實態など、今後さらに解明すべき重要な問題を提起している興味深い章である。第六章と第七章は、ともに『弘明集』と『廣弘明集』を題材とする論考である。『弘明集』と『廣弘明集』の

編纂には百五十年ほどの隔たりがあるが、兩書に見られる道教批判と道教教理理解には共通點と相違點があることに着目し、それらを通じて、梁から唐初までの間の道教の變化を窺おうとしたものである。結論として、第六章では、『弘明集』においては佛教側が力を盡くして對抗しようとした相手は儒教であつて、道教に對しては經典や教理はそれほど問題とされていなかったが、『廣弘明集』では道典の引用や道典への批判、道教の王權侵害に關する記述などが増えており、それは『弘明集』から『廣弘明集』へ至る間に、道教側で教理體系や儀禮の整備、諸々の制度改革が進んだことを反映しているとする。

また、第七章では、『廣弘明集』に收録された文章からは、南北朝末期以降、佛教陣營が道教教理をより深く理解し、道教經典をきちんと列舉引用した上で、その論理上の不備を厳しく論難していることが窺え、そのような佛教側からの論難を受けて道教はさらに佛教教理を吸収して道教教理に融合していくという過程を繰り返したと述べる。著者も認めているとおり、護法の書である『弘

明集』『廣弘明集』の中には道教教理が全面的に反映されているわけではないという限界があり、また、導き出された結論そのものも、それほど新鮮なものではないが、佛教という他者からの視點を手がかりに道教の變化を見るところという著者自身の方法で、道教の教理形成過程を検討し、その大きな流れを確認したものと云えよう。

第八章は、六朝隋唐時代に行われた道教の自己改革を、王權と社會の主流イデオロギーに屈服した歴史であると捉えた葛兆光氏の説（葛兆光著『屈服史及其他…六朝隋唐道教的思想史研究』）を念頭に置きつつ、儒教（王權）と道教の關係に焦點をあてて二教間の交渉の様相を考察したものである。著者は、儒道二教の關係は儒佛二教間のように衝突が顕在化することはなかったが、水面下では競合し緊張關係も存在していたと述べ、その例として、道教の祭祀儀禮と儒教の六天説との關係を取り上げている。道教は儒教の祭天思想を受容しながらも、儒教の至尊神の昊天上帝を元始天尊に、五方帝を五方老君に置き替えるという形で換骨奪胎し、道教の獨立性を維持しよ

うとしたと著者が述べているのは、儒教の祭祀傳統と道教の祭祀儀禮との融合に注目した興味深い指摘である。

ただ、ここで著者はさらに論を進めて、道教は儒教の祭祀を「六天故氣」と貶め、独自の「三天正法」の思想を打ち出して儒教に對する優位性を宣揚しようとしたと述べているが、道教の六天説や三天との關係などについては、いくつかの議論があるところであり、この點については今後さらに慎重な検討が必要であらうと思われる。

最後の終章では、本書全體のまとめが書かれ、そのあとに、參考資料のリストと「三教關連略年表（東周～五代）」、および、事項、人名・神名、書・章・符名、地名の索引が附されている。

あとがきによれば、本書のうち、第一章の一部と第四章・第五章・第七章はもともと臺灣の學術雜誌に中國語で發表された論文をもとにしているとのことであり、博士論文として提出する際か、あるいは本書を刊行する際に、著者の母語である中國語から日本語に譯されたものが本書の少なからぬ部分を占めていることになる。本書

の中に、日本語として不自然な言葉使いや讀みにくい文が若干見られるのは、本書のそのような成立事情と關係しているのであらう。しかし、内容的には、約十年に及ぶ日本留學を含む著者の永年にわたる研鑽の成果が十分にあらわれた書であり、多岐にわたって検討すべき課題の多い南北朝隋唐道教思想の一角を、大きな視點から意欲的に究明しようとした優れた研究であると言えよう。本書を出發點として、著者の研究がさらなる進展を遂げることを願ってやまない。

（A5判、五四六頁、二〇二二年三月、汲古書院、一四三〇〇圓（税込））